

# 令和4年度 会派調査研究報告書

(視察先1箇所につき1枚)

会 派 名	上志の風	
事 業 名	先進地視察 熊本県水俣市	
事 業 区 分	①研究研修	②調 査

## 1 上田市での課題と研修・調査の目的

現在上田地域では資源循環型施設建設が最重要課題である。一方で、私たち市民も昨今の温暖化やごみによる環境への影響などを鑑み、行政と一対となり取り組む必要があるのが、ごみの減量である。上田市として3R（つまり、リデュース、リユース、リサイクル：「発生抑制」、「再使用」「再生利用」）を推進している。一朝一夕ではこのような行動変容は課題であり、また、分別において、住民一人ひとり、地域での取り組みが重要であると考えらる。

今回訪問した熊本県水俣市は平成5年（1993年）からごみの分別収集を行っており、現在は24種類と全国でも最も細かいレベルにある。「水俣エコタウンプラン」を水俣病により崩壊したコミュニティの再生および、環境関連産業の復興を有機的に結び付けたまちづくりを目指し策定。2001年には経済産業省と環境省の承認を受けた。このような取り組みと、水俣病が引き起こした事柄からも、環境問題の解決の大きなヒントが得られると確信し、また上田地域、上田市が目指す社会情勢にも大変参考になると考え現地に赴き調査研究を行った。

## 2 実施概要

実施日時	視察先	熊本県 水俣市
令和4年10月19日 9:30 ~ 11:00	担当部局	水俣市福祉環境部 環境課環境もやい推進係

1 市の概要

熊本県最南部、熊本市から南西に約70kmの場所に位置する。南は鹿児島県に接し、西は八代海に面するリアス式海岸である。中心部はJNC（チッソの子会社）とその関連工場などが多く立地し工業都市のイメージがあるが、北・東・南の三方を山に囲まれ緑の多い土地である。人口は水俣病発生後しばらくしてから減少傾向が続いており、2000年代前半に3万人を割り込んでいる。（現在人口約23,000人高齢化率約40%）

3 視察事項について

水俣市エコタウンについて

・エコタウン事業とは

国（経済産業省と環境省）が平成9年度（1997年度）にゼロミッション構想（廃棄物ゼロ）を進める為に創設した制度。

概要 地方公共団体より、エコタウンプランの申請（熊本県・水俣市）国（環境省・経済産業省）の承認を受ける⇒国からの総合的・多面的な支援を受けられる。

平成23年10月現在 全国26地域がエコタウンプランの承認を受けている

長野県では平成9年飯田市

水俣市における「エコタウン事業」に対する真の目的

水俣病からのまちの復興を目的とした「企業誘致」である

歴史的背景

日本の高度経済成長を支えたチッソ水俣工場 1950年ごろ活気にあふれ当時人口は50000人を超えていた。ピークを迎える矢先、水俣病が判明。「1956年5月1日水俣病発生」

この日を境に市外部へ風評被害が広がり、物が売れない、人が来ない、就職ができない、水俣市出身と言えない状況へ。

市内部では、患者当事者やその家族が其々の立場から分裂し、人と人との大切なつながりがめちやくちやになった。

1977年～1990年の13年間をかけ、総事業費485億円を熊本県が拠出し水俣湾埋立事業を実施

現在「エコパーク水俣」であり、埋立地は58ha。

復興に向けた4つのステージ

《第1ステージ》水俣患者の早期救済 1995年政府により早期救済へ（政治的）

《第2ステージ》もやい直し運動の展開 数多くの催しを通し立場の異なる住民同士の対話

《第3ステージ》将来ビジョンの確立 「環境・健康・福祉を大切にする産業文化都市」を将来像として6つの基本方向を掲げ施策を展開

・市民参加のまちづくり、水俣病問題の解決と環境再生・創造、水俣文化の創造、元気で賑わいのあるまちの創造、人にやさしい生活の創造、自然

とともに生きる暮らしの創造

キーワードは「環境モデル都市」

《第4ステージ》将来ビジョンに向かっての行動

市民共同によるごみの分別活動（1999年20種類）

中学生も部活動の合間に手伝いをするなど、分別の習慣の歴史は長い

転回点

環境保全への市民の行動⇒価値観の転換⇒行動を経済的にプラスへ

《第5ステージ》産業復興による地域経済の浮揚

みなまたエコタウンプラン策定平成13年2月承認

これによりお金も稼ぐことができ、地域や人が元気に

「水俣エコタウンプラン」

・コンセプト 小規模 全国中小都市のモデル リユースの推進 市民、行政、産業界による三位一体 身の丈にあった、市民総参加型

企業立地 現在9社が立地（2001年から増減あり2022年10月現在）

- ・びんのリユース、リサイクル施設 古紙リサイクル施設
- ・使用済みオイルリサイクル施設
- ・建設廃材、アスファルトリサイクル施設
- ・ペットボトルリサイクル施設
- ・廃プラスチックリサイクル施設
- ・家電リサイクル施設
- ・非食用米等を原料としたバイオマスプラスチック原料製造施設
- ・し尿等を原料とした肥料製造施設
- ・生ごみリサイクル施設

好循環へ

市民による「ごみ分別」の実践⇒環境保全行動⇒企業による事業の創出⇒

↓

経済活動への転換

《持続可能な資源循環型地域社会の実現》

単に環境に配慮するだけでなく、そこに暮らす住民が環境を軸としながらも、元気で、こころ豊かで、楽しく、賑わいのあるまちをつくること

## 感想とまとめ

・水俣病という重い歴史の中で、市民、家族までもが分断され一時は都市の崩壊へ向かった。そこで、もやい直しを実行している。未だ、その名残はあるものの、進み続けなければならない背景。

ごみの分別の意識は、環境保全に対する、強い意識は充分である。数十年にわたる分別活動により、市民の意識というよりは、習慣なのであると感じた。

また、分別したものを稼ぎへとつなげるため、企業を誘致している。おそらく、そのリサイクルなどの技術開発は、今後の世界を救うものになると確信する。

私たち人間が瞬間的に不必要となったものを「ごみ」と呼ぶが、水俣は資源であるとの認識が強いのだと感じた。

上田市・上田地域においても今後目指すビジョンは資源循環型都市形成であることから、産学官一体となることは勿論のこと、一人一人の意識造成がポイントであると感じた。







\* 視察先の写真等がある場合は添付のこと

